

思ひ草

第41号

令和5(2023)年7月7日 発行

コロナ後の世界へ

人間開発学部長 おおた なおゆき 太田 直之

今年度に入りCOVID-19のパンデミックはようやく世界的に収束傾向となりました。WHOの緊急事態宣言が解除され社会全体が以前の状況に戻つつあります。COVID-19が無くなったわけではなく、後遺症による健康被害への対処も確立されていない状況ではありますが、対面での社会活動全般を抑制することが必要な状況は終息したと言って良いでしょう。

活気ある日常を取り戻すことは誠に喜ばしいことです。ただ、世界で700万人近い犠牲を出した世界史的な災禍を経験して、私たちは何事も無かったようにコロナ以前と全く同じ状態に戻ることができるのでしょうか。

今回のパンデミックを迎える前、日本社会においては、伝染病は保健や医療の発展によってある程度克服され、一つの病により社会が麻痺する事態は過去のものであるという意識が存在していました。しかし、こうした思い込みはあっさりと打ち破れ、我々の社会の安定は意外と脆弱なものであることを思い知らされました。今後はこうした脆弱

性を前提として社会活動を考えていく必要があります。

また、教育現場について見れば、我々教員の多くは授業や業務のデジタル化・オンライン化は、その存在や必要性は認識していても自分とは縁遠い、無関係のものであると認識していました。ツールや環境はある程度整っていても、積極的にこれを受け入れることはしていませんでした。しかしコロナ禍を通して否応なしにオンラインでの授業に対応し、WEB会議を実施することとなり、今ではこれが当たり前のこととなっています。

パンデミックを通じた社会の変化はこれから明らかになっていく部分も多いと考えられ、恐らくコロナ前に戻るとは言っても、まったく同じ社会が戻ってくるわけではなさそうです。教育実践の場においても、様々な変化が起こってくるでしょう。目の前の変化に対応しながら、時に社会全体を俯瞰的に観察して変化の相を自分なりに捉え、変化の渦に翻弄されないよう心掛けたいものです。

初等科教育法(外国語)の現場より

初等教育学科准教授 おさだ えり 長田 恵理

初等教員養成課程で外国語指導法が必修になったのは2019年に教員養成課程のコアカリキュラムが施行されてからである。2020年度より導入される外国語科についてはより詳細な内容が提示され、「模擬授業を行う」という項目も含まれる。

小学校での外国語学習は教育課程において必修になる少し前から随所ですでに始まっていたが、カリキュラムも指導者も地域によってさまざま、英語が堪能な地域人材であったり、市井の英語英会話教室講師であったり、あるいは大学の教員や近隣中学の英語教員が指導者として教壇に立つこととなった。当時英会話講師であった私自身、そのような指導者のひとりであり、指導のノウハウはあったが、クラスサイズや学習目標が異なる学校教育においてそのノウハウそのままでは通用せず、試行錯誤の連続であった。教員養成課程において、外国語指導のトレーニングを受けていない担任の先生方にとってはなおさら戸惑うことが多かったことと思われる。

教師の認知は「自身の受けた教育」「教員養成課程での学び」「教育実習を含む指導実践」によって作られる(Borg, 2006)と言われている。近年、小学校で「外国語活動」の授業を受けた世代が大学に入学してきているが、尋ねてみるとこちらが思うほど明確に記憶に残ってはいないようだ。「中学年の外国語活動では文字指導は行わない。音声中心で」と説明しているのだが、模擬授業を行うと単語や文を読ませようとする。これまでの自身の英語学習において、文字を介さずに学習する経験が乏しいことが推測される。児童役も大学生であるため、模擬授業の効果がいかほどか疑問の声もあるかもしれないが、やってみてこそ見えてくるものがあり、学生の省察からも様々な視点からの気づきがあることがわかる。15回の授業の中で全員が教師役になることは困難ではあるが、大学での学びが将来の実践につながることを期待しつつ、今期2度目の模擬授業に挑む。

保育実習

より良い実習を目指して

子ども支援学科准教授 あおき こうたろう
青木 康太郎



保育実習指導を担当していた時に大切にしていたことは実習に向かう心構えをつくることです。最初の授業では「明日から現場に立って」といきなり言われたら、みんなどう思う？」とよく問いかけていました。そういわれると、「いきなりはちょっと」「その前に少しやらせて」というのが人の心情。ですので、こう問いかけることで、実習に行くのは「資格を取るのに必要だから」ではなく、「保育士として現場に立つために必要な助走」という気持ちをもってもらえたらと思っていました。

もう一つ、言っていたことがあります。それは「大学での学びには限界があり、これだけでは不十分」ということ。こういうと「言われなくても分かってるよ」という雰囲気になりますが、実習指導の段階で、実習の本質をきちんと理解している学生はそう多くはないと思います。多くの学生は、実習は「大学では学べないことを現場で学び、経験してくること」と思っているのではないのでしょうか。これは半分正解といえますが、実際の現場に行く意義はそれだけではありません。リアルな保育現場という複雑な状況の中で、大学で身に付けた知識や技能を総合化し、状況に合わせて活用と実践を繰り返すことで、現場で使える生きた知識・技能へと昇華させていくことが大切です。先ほどの不十分というのは、足りない学びを補うという意味ではなく、大学で学んだだけでは現場で使える力にはならないということです。ここに実習の本質があるといえます。

実習を終えた学生から、「実習前にもっと復習しておけばよかった」という声をよく聞きます。実習前に復習しやすくするには、授業で学んだことを系統立てて整理し、学習のポイントをいつでも振り返るようにしておくことが大切です。これから実習に行く学生みなさんには、教室で学んだことを現場でどう活かせるのかという視点を持ち、各授業での学びを深めていってほしいと願っています。

子ども一人ひとりと向き合うことの大切さ

子ども支援学科 3年 なかの みゆ
中野 未悠

私は、今年の二月に保育所で二週間保育実習に取り組みました。今回の実習では、様々な年齢のクラスに入らせていただくことで、それぞれの年齢による発達やそれに伴う保育者の援助、実際に子どもたちと関わることの大変さややりがいについて学ぶことができました。

私が保育実習で特に学んだことは、子ども一人ひとりと向き合うことの大切さです。実習中、どの年齢のクラスでも、子どもの発達や個性に応じて保育者が援助を行ったり、声掛けをしたりしていたのがとても印象に残っています。一歳児クラスに入らせていただいたとき、外へ遊びに行くために靴下や上着、帽子、靴を着用する場面がありました。その時に、子どもそれぞれにできることがあり、まだ難しいと感じる部分があることから、一人ひとりのできることは尊重し、できないところは保育者が少し援助している姿を見て、また、私自身も保育者に子どもたちがそれぞれこの部分が自分でできるのかを伺いながら実際に関わっていく中で、目の前にいる子どもを知り、その上で関わっていくことの大切さを学びました。実際にこの場面では、靴を履くのを難しく感じている子どももいましたが、私の肩につかまれるようにしたことで子どもが踏ん張りやすくなり、子ども自身の力で靴を履くことができたことから、子どものできなかったことができることに変わる最初の一歩の中には、保育者の援助によって踏み出すことができるものも沢山あるのだと身をもって感じる事ができた出来事になりました。

年齢が同じであっても、成長には個人差があり、一人ひとり個性もあります。その中で子どもが健やかに成長していく為には、保育者が子どもそれぞれと向き合い、その子どもに適した声掛けや援助をしていく必要があります。それはとても大切なことであると同時に難しいことでもあります。日頃の大学での学びやこの先の実習を通してさらに経験や学びを深め、将来現場に出たときにそれまでの学びや経験を活かしていけるように頑張ります。

転入教員紹介

教師という職業

教育実践総合センター客員教授 い だ ひ と し 井田 均



私は元中学校の教員です。お陰様で、若い頃から様々なことを経験することができました。振り返ってみると、今まで教員を続けてきて本当に良かった…と心から思います。そう感じるきっかけとなったある講演会での話の一部を紹介して転入挨拶とします。世の中には様々な職業がありますが、その中で「精神衛生上、もっともよい職業は何か？」という話です。答えは、ペンキ屋さんだそうです。といってもペンキを「売る人」ではなく、「塗る人」だということです。その理由は次の通りです。ペンキさんは一日中ペンキを塗ります。そして、一日の仕事が終わって振り返ると、その日一日の仕事をすべて見渡すことができます。つまり、自分がした仕事を「量」として確認できるというわけです。そしてこのことが、働いた人の気持ちを安定させ、満足感や心の安らぎにつながるというのです。そして、この話には続きがあります。「世の中でもっとも精神衛生上よくない職業は何でしょう？」です。勘のよい方はもうおわかりでしょう。答えは、学校の先生です。その理由は、ペンキ屋さんの反対だからです。私たち教師は、子どもの成長を願って、毎日全力で指導を行います。そして一日働いて、その日一日を振り返ってみたとき、塗ったはずの壁に全くペンキが塗れていなかったり、それどころか、あれだけ苦勞して塗ったはずの昨日までの分まで消えてしまったりしていることもたびたびあります。教師という仕事は、私の経験から振り返っても思い通りの結果になることなどはほとんどありません。しかし、それが子どもを育てるということだと私は思っています。だからこそ大切なのは、私たちは日々「精神衛生上もっともよくない仕事」をしているのだと「自覚」することだと思います。そして、そんなに大変だけど大切な仕事をしている、また目指している自分に誇りを持ちましょう。最後に、私の最も好きな言葉を紹介して終わりにします。『自分を元気づける一番よい方法は、誰かほかの人を元気づけてあげることです』

教育インターンシップ連絡協議会・報告会

経験からの学びを生かす

令和5年1月24日(火)、令和4年度教育インターンシップ連絡協議会・報告会を2年ぶりに対面で開催いたしました。全体会では藤田大誠副学部長から、教育実習前の経験としての教育インターンシップの意義と学生への指導に対して、受入れ校・園・施設へお礼の言葉がありました。

その後、令和4年度教育インターンシップの全体的な実施状況の報告に引き続き、学生の実習報告と学校や幼稚園の先生方からの実施状況報告がありました。幼稚園実習について子ども支援学科2年の高久佳映さん、小学校実習について初等教育学科2年の小松久礼葉さん、中学校実習について健康体育学科2年の越愛叶さんが教育インターンシップの経験や学びをもとに報告しました。また各園や学校の実施状況について、川崎市立土橋小学校教頭の小泉昌和先生、横浜市立市ヶ尾中学校生活指導専任教諭の門澤祐輔先生、横浜市立美しが丘保育園主任の塩島桂子先生から学生の実習の様子や今後学生に期待することなどのお話をいただきました。

そして第2部では、受入れ校・園・施設の多くの先生方にご参加いただき、校種別に分かれた分科会を行い、「教育インターンシップの経験を教育実習にどう生かすか」のテーマのもと、先生方からのアドバイスを参考に活発な意見交換を通し、学びを深めることができました。

教育インターンシップ

机上では学べない、人との関わり

初等教育学科 3年 ^{こだいら こうせい}小平 晃生

私は大学2年生の6月から9月にかけて小学校で教育インターンシップに取り組んだ。そこでは授業準備の手伝いや授業補助が主な活動内容であった。その他にも休み時間など子どもたちと触れ合う機会があった。実際に学校現場に出るのは初めてだったため、最初は緊張したがそれもすぐに無くなった。学校での子どもたちのエネルギーに刺激を受けたからだと思う。彼らが持つエネルギーに負けないように積極的に活動し、多くのことを経験した。

その一つとして、「児童との関わり方」が挙げられる。私は教育インターンシップの目標に、「適切な児童との関わり方を知る」というものを掲げた。結果としてこの答えを見つけることはできなかった。私が想像している以上に多様な子どもたちの姿を見たからだ。ただ、それ以上に学びがあった。好きなものや得意なこと、あるいは嫌いなものや苦手なことは子どもたち一人一人異なるため、いわゆるありきたりな関わり方では適切だとはいえない。その児童が持つ個性や性格を理解した上での関わりが大切であると感じた。例えば、国語の授業で作文を書くときに、「分からない！分からない！」と大きな声を出してしまう児童がいた。その児童は、少しの不安でも気持ちが昂ってしまう傾向があるということをおよぼす関わりから気づいていた。そこでどこが分からないのか、何を書こうとしているのかを聞いて少し手伝うと、スラスラと作文を書き始めた。児童の性格を理解しているからこそできた支援だと思う。

人それぞれ違った性格を持つという当たり前のことを、実際に学校で子どもたちと関わる中で再認識することができた。そして、みんな違う中で集団生活をするのが学校であり、彼らが心地よく学びに取り組めるようにするのが教員の役割であると感じた。そのために子どもたちとの信頼関係を築くことが非常に重要であるということをおぼすことができた。

この経験を自らの糧に

健康体育学科 3年 ^{とちぎ りほ}栃木 莉穂

私にとって、2年次の教育インターンシップは、これからの将来を見据えるきっかけとなるものだった。正直、「教師になる」ということに対して100%の気持ちを持っていないまま取り組んだ教育インターンシップだったが、実際に教育現場に出て子どもたちとの関わり、先生方の指導や仕事の様子を間近で見て経験する中で、インターンシップ実習生ながらに教師のやりがいや魅力を感じることができ、「教師になりたい」という決意の固まったこの経験は自分の中で有意義で実りのあるものであったと強く感じている。

「経験あるのみ」ある先生がかけてくださった言葉だ。「何が正解で失敗かもわからないうちは当たって砕けてみる」と。子ども達とも関わり方に迷っていた私を見兼ねて掛けてくださった言葉であると思うが、私はこの助言から積極的に子ども達と関わったり指導に入ったりするようになった。すると、次第に子ども達の関わり方や指導の方法の選択肢が増えるとともに、子ども達とも良好な関係を築けるようになった。ここから、経験が物を言うということ、そしてその経験は成功ばかりではなく、失敗や子どもの姿から学ぶことも必要だということを感じた。まだわからないことを学ぼうとするのだから、失敗を恐れずに前のめりに、貪欲に取り組む姿勢を持つことが自身の成長のためだと強く思った。

また、課題設定を行うということも大切だと学んだ。流れるように様々なことが起こる学校現場の中では、意識しなければ見えない、見逃してしまうことが多くあった。どこに着目したいのか、先生の姿なのか子どもの姿なのか、自分の意識次第で得られる学びには大きな差が生まれるということをおぼすことが必要だと感じた。この経験から、現在も学校支援員として現場に関わり続ける私は、自分なりの課題設定を行いながら日々取り組んでいる。自分を成長させてくれる環境に感謝し、この経験が将来の自分にとって大きな糧となるようにこれからも学んでいきたい。

今年度のスタッフ

◆教育実践総合センター

センター長 近藤 良彦 副センター長 高橋 幸子
担 当 小笠原優子 井田 均 岩城眞佐子

國學院大學人間開発学部教育実践総合センター
〒225-0003 横浜市青葉区新石川3-22-1
電話:045-910-3760 fax:045-910-3756